

令和8年度あわじ環境未来島構想推進協議会総会議事概要

1. 日 時：令和8年5月29日（金）14時30分～16時20分
2. 場 所：淡路夢舞台国際会議場 2階メインホール
3. 構成団体数：112団体
4. 出席団体数：52団体（委任状出席32団体）
5. 出席者：別紙のとおり

発言者	内容
<p>田所 会長 （（一財）淡路島く にうみ協会）</p>	<p>1 開会 （開会挨拶）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、淡路島において大阪・関西万博と連動して開催された「AWAJI 島博 2025」では、島内全域を舞台に自然・食・歴史文化を体感できる多彩なプログラムを提供し、多くの来訪者を迎えるなど大きな成果を挙げた。 また、今年度は万博パビリオンの展示を活用した施設整備など万博レガシーを活かした新たな取組が進められており、引き続き淡路島への関心の高まりが期待される。 ・あわじ環境未来島構想は2011年12月に国の地域活性化総合特区の指定を受けてから14年余りが経過した。この間島内各所で様々な取組みが行われてきた。 ・本日は、①総合特区としての事後評価、②構想の実現に向けた取組の状況、③特区第4期計画の策定、④構想の実現に向け取組まれている方々からの活動状況報告等をいただく予定としている。
<p>高木 県民課班長</p>	<p>（来賓・アドバイザー紹介、プログラム流れ説明）</p>
<p>松田 県民躍動室長</p>	<p>（出席状況を事務局から説明）</p> <p>構成団体数 112 団体中 出席 52 団体（オンライン参加を含む） 委任状出席 32 団体 の計 84 団体が出席。</p> <p>規約第11条に定める総会開催要件の全構成団体 1/2 以上の出席を満たしており、本総会は有効に成立している旨を報告。</p>
<p>松田 県民躍動室長</p>	<p>2 議事</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 副会長の選任について (2) 規約の改正について (3) 企画委員会委員の指名について <ul style="list-style-type: none"> ・資料1～3のとおり説明・報告、異議なしで承認 (4) 総合特別区域事後評価について

<p>青木 広域調整課長</p>	<p>・資料4-1, 2, 3のとおり説明</p>
<p>松田 県民躍動室長</p>	<p>(5) あわじ環境未来島構想の推進状況について ・資料5-1, 2, 3のとおり説明</p>
<p>松田 県民躍動室長</p>	<p>(6) あわじ環境未来島特区第4期計画の策定について ・資料6のとおり説明</p>
<p>吉田 氏 (淡路市有機農業 産地づくり協議会)</p>	<p>(7) 活動状況報告等</p> <p>①地域資材を活用した持続可能な農業への試行的取組</p> <p>背景として、淡路市は放置竹林面積が著しく拡大しており、また、耕作放棄地の面積も他市に比べて多いという課題を抱えている。あわじ環境未来島構想モデル事業では放置竹林の利活用に着目し、近年価値が再評価されているバイオ炭の活用に取り組んだ。</p> <p>元々バイオ炭は古くから農業分野では土壌改良材として活用されており、保水性や透水性を上げる、肥料保ちが良くなる、微生物の住処になるということで価値が認められてきた背景がある。それに加え、近年では大気中のCO₂を吸収した天然由来の植物を炭として農地に埋めることで、脱炭素の取組である炭素貯留であると認められ、J-クレジット制度の中で明文化された。ここ数年の間に経済的メリットを受けられ、環境的価値を認められるようになった。</p> <p>当取組の中では、放置竹林由来の竹を原料に竹炭（バイオ炭）を製造し農地に施用することで、地域課題の解決につなげることを目標にした。作った竹炭は協議会のメンバーである五斗長営農様の玉ねぎの農地やフレッシュグループ様のブロッコリーの農地の一部に試験的に施用したため、本日その結果を報告させていただく。</p> <p>玉ねぎ・ブロッコリーいずれの農地においても、バイオ炭施用区の方が収量が増加したり肥料成分の吸収量が増えたりするなど、バイオ炭施用なしの区画と比べてより良い効果が得られた。全体としてバイオ炭による土壌改良効果がしっかり出てきたかと思う。</p> <p>モデル事業の取組における竹炭利用の意義について、農業的効果は先ほどまでの結果で見えてきたが、仮に竹炭1tを農地に施用することで、今後は1.6t-CO₂相当の炭素貯留効果がJ-クレジット制度で認められることが伺える。また竹炭1tで生竹3.5t相当となるため、放置竹林整備への寄与が期待されている。</p> <p>一方、課題も見えており竹炭の製造コストが非常に高い。放置竹林の伐採や炭化作業、煙や臭いへの環境規制対策にコストがかかってしまう。製造効率化によるコストの削減や農業者へ施用についてのメリットを訴求していくことが必要である。</p> <p>②淡路地域でのグリーン水素の地産地消の検討</p>

松岡 大気班長
(兵庫県環境部水
大気課)

兵庫県の水素の取組には5本柱があり、当課はその中の水素エネルギーの地産地消と水素モビリティの普及促進を担っている。水素モビリティの普及促進の取組において、水素ステーションの整備促進も行っているが現在は兵庫県内に6基ある。令和5年度には県内のステーション整備に向け、地域特性に合わせた整備方策を定めた。

阪神・播磨地域については、主に瀬戸内臨海部に重厚長大産業が集積しており大規模な物流拠点もたくさんあることから、たくさんのトラック・バスが走行しているエリアである。国としても水素モビリティの普及にあたっては、EVと比較して1回当たりの満充填での航続距離が長いということと、充填時間がガソリンのように短いという2つのメリットを生かせるFC商用トラック・バスを普及拡大させようとする動きがある。県としても国の動きを踏まえ、FC商用車の普及拡大とそれに合わせたステーション整備を目指している。

一方、淡路地域については、再エネが豊富であるということと、水素モビリティだけでは水素の消費量を稼げないということから、モビリティ以外の熱利用も含めたグリーン水素の地産地消を検討している。現在、水素を使っただけの事業者が少しずつ集まってきている。

まず、水素を作る部分については、太陽光や風力をはじめ3市の広域ごみ処理施設におけるごみ発電や地域新電力由来の多種多様かつ豊富な再エネを活用する。東京大学発のスタートアップ企業に協力いただき、海水から水素を作る装置を開発中である。

水素の活用先の候補として、モビリティ以外の熱利用では瓦産業におけるバーナーでの混焼利用や大型商業施設における空調利用、水産加工施設におけるボイラの燃料利用や農園・レストランにおけるグリルへの利用などである。

こういった形で様々な事業者が集まっているが、行政側も公共施設において水素燃料電池を導入検討している。もちろん電気は電気として使う方がエネルギー効率は良いが、水素には蓄電池のようにロスをせず長期間安定的に貯められ、また、ボンベなどに入れば輸送もできるという2つのメリットがある。1つのエネルギーに頼らず島内で水素を作ればBCPの観点からも有用であると考えており、公共施設に水素燃料電池を導入できないかということで県や島内3市の施設に検討いただいている。

描いている構想が本当に実現可能かどうかというのは、今年度まずFS(実現可能性調査)事業で机上の計算をしっかりとしていきたい。県で予算を確保しているためコンサルに委託し、本当に実現可能か、また、実際に水素を使っただけの価格まで落ちるのかということろまで含めて検証していきたい。

<p>齊木 名誉教授 (神戸芸術工科大学)</p> <p>手塚 名誉教授 (京都大学)</p>	<p>FS 事業を行ったうえで先ほどのモデルを精査し、実現可能性のある工程を令和9年度以降に実証・実装につなげていきたいと考えている。こういったやり方があるかという出口戦略もしっかり考えていきたい。</p> <p>少しずつ取組を進めてはいるがまだまだプレイヤーが足りない状況である。誰に再エネを提供してもらい、誰に水素を作ってもらい、誰が売するのか、ということや水素ステーションをどこで整備して誰が運営するのか、というメインの部分を担当するプレイヤーはまだ見つかっていない。水素を使う部分も含めて興味のある方がいらっしゃれば当課までご連絡いただきたい。</p> <p>(7) 意見交換</p> <p>アドバイザーから</p> <p>今日お話をお聞きして具体的なテーマが島に着地したという印象を強く持った。エネルギー・農と食・暮らしの持続の3つの柱が進化したと思う。</p> <p>暮らしというのは生活の基盤となるが、エネルギー・食と連携している。3つの柱が実際にどういう関係を持ち地元の方々が実感しているか、これが大きな課題であると思う。</p> <p>特に食では、プロジェクトを進めるうえで農業に従事する方々の跡継ぎや新規就農者などの人材をどう獲得するか。次のステップでは人材養成の様々なプロジェクトが始まるとお聞きしたが、それと同時に今、淡路で農業に従事している方々の跡継ぎに対する支援の取組は大事だと思った。</p> <p>また淡路は広い農地と里山があるが、農業に従事する方々が維持管理している。農業従事者の人口減少や高齢化が進む中で農地や里山の環境をどのように維持していくか。そういったことが今回の計画の中で連携することを願っている。</p> <p>最後に、今日は魚やキノコを食べてきたが農業には海との関係を持った話もあると思うので、農業と里山、漁業を上手くつなぎ、食の持続のテーマを進化していただきたい。そのためには淡路を断面で捉えることが必要かと思う。農業従事者の方々はため池の水を大事にして農業を維持されているが、過去に阪神・淡路大震災が発生した際はため池の水が抜けたため農業生産に大変苦勞されていた。これも海とのつながりから考えると海から森の治水に関係する。農と里山、海を上手く連携した食の持続を展開することが課題かと思う。その主体は人である。人をどう位置付けるかというのが島民にとっては大きな課題であると思う。</p> <p>非常にたくさんの取組を着実になされていることに感服した。私の専門分野はエネルギーと情報であり、本日はいくつかお願いを</p>
---	---

<p>中瀬 名誉館長・名誉教授 (兵庫県立人と自然の博物館・兵庫県立大学)</p>	<p>しようと思ってやってきた。</p> <p>エネルギーというのは供給するだけではなく、需要があって初めて供給が生まれるという非常に面白いものである。先ほど水素のお話もあったが、恐らく再生可能エネルギーというのは化石燃料ほどいつでもどこでも自由に使えるというようにはならない。そうすると、エネルギーをどう使うかといったところから考えるのが大事。水素もどこで使っていたかという話があったが、まずは我々が再生可能エネルギーでどんな生活をエンジョイできるのか、というところからスタートし、そこに太陽電池や水素、風力発電がどのように関わってこられるのか、という生活や需要の部分から議論を始められるともっと色々な人が参加できると思う。供給となると技術のある方々しか議論に参加できないので偏った意見になってしまうが、生活が中心であるため誰でも議論に参加できるような社会が実現すれば良いと思う。</p> <p>第3期計画では特区制度を活用されていないということであるため、第4期計画ではこういった特別区を作るといったことを前面に出せないかと思って話を聞いていた。淡路でモデル地区を決めて、面白い未来生活が体験できるような取組ができれば第4期計画の目玉になるのではないかと思う。</p> <p>平成23年から15年経った。「生命つながる『持続する環境の島』」ということで、15年前にも先ほどお二人がおっしゃられたような、暮らしや島民の生活、交流などを議論していたことを思い出した。決して我々はつるんでいるわけではないが、地元の方々の生活や参加の仕方はどうなるのかと気になった。</p> <p>私自身は自然や環境の専門だが、この15年の間に日本の陸域・海域の30%について、自然共生サイトでは生物多様性を保全する地区にしようといった動きがある。淡路島では石の寝屋が指定されている。こういった動きをこれからどう捉えていくのか。例えば農地であれば、あぜ道や水路の生物多様性の保全が重要。12月上旬に淡路の舟木に来るとリンドウが見られる。淡路景観園芸学校の横の田んぼにも林道がある。リンドウが見られるスポットは、淡路においてはその他にない。そういったものを発掘して残せるような生物多様性の地域というのをどう維持していくか。あわじ環境未来島の背景を保全しながら新しい取組を行うという両輪をしっかりとっていただきたい。</p>
<p>森栗 招聘教授・研究員 (大阪大学・関西学院大学災害復興制度研究所)</p>	<p>せっかく計画の策定のタイミングなので評価方法を見直しても良いのではないかと思う。先ほど先生方から、人々の暮らしに着目しないといけない、水素エネルギーも重要だが、人々の暮らしの中でどういった位置付けや開発になっているのかしっかりと見なければならぬというようなお話が出てきた。15年前に構想の議論をした際にも、人々の暮らしがどうなるのかといったところから、生命つながるとい</p>

	<p>う話をしてきた。考えて頑張っって何とか数字で表したいということで分かりやすい指標を作っていたが、そろそろ見直しても良いと思う。</p> <p>例えば、水素エネルギー関連施設数を2基に増やすという指標は分かりやすいが、手塚先生のおっしゃるように、人々が暮らしの中で生命つながるといような形になっているかどうか。定性的なものかもしれないが、定量的な評価の新たな枠組みを考えるためにも次期計画では評価のあり方を考え直していただけたら良いと思う。そう考えると、移動において人々が暮らしの中で移動手段を確保できているのかという本来の課題がある。次世代自動車の登録台数ではない。この実績値も低調ではあるため、次世代自動車の登録台数だけを見て議論するのではなく、もう一度淡路の人々の暮らしが持続しているのか、移動手段が確保できないというのはどういうことか、それを評価するにはどうしたら良いのか。一気に全て変える必要はないが、もう一度指標を見直した計画を策定してほしい。より良い評価指標ができることを願っている。</p>
<p>木村 元委員長 (第3・4期淡路地域ビジョン委員会)</p>	<p>構成団体から</p> <p>本当に素晴らしい事業を展開されており、島民の一人として感謝申し上げます。</p> <p>バイオマスの利用推進ということで南あわじ市が多く取り上げられているが、洲本市・淡路市の状況を教えてください。</p> <p>淡路島観光戦略の推進とあるが、私が過去に淡路島の観光に取り組んでいた時は淡路島の魅力を発信して一人でも多く淡路島に来てもらうよう呼び掛けていた。しかし、社会や世の中はどんどん変わっていき淡路島の観光状況も変わっている。今の淡路島は来られたお客様を如何におもてなしするか、如何に良い形でお帰りいただくかというのがテーマである。車の駐車場や交通渋滞、自転車であられている方の安全整備の問題があるが、淡路島はそれらへの対応が非常に遅れている。今年度は更に強化に取り組んでいただきたい。</p> <p>あわじ環境未来島構想に関して、3つの柱が本当に持続できているのであれば人口は絶対に減らない。全国あちこちで人口は減っているが、本当に持続しているなら人口が増える淡路島であってほしい。淡路島は国生み神話の島なので、淡路島へ来られたら、素晴らしい景観や美味しい食材、歴史・文化や人とのふれあいの中で元気になって帰っていただくという、黄泉がえり（蘇り）の島であってほしい。そういった内容をぜひ、あわじ環境未来島構想の中で取り上げていただきたい。</p>
<p>岡田 部会長 (「環境立島淡路」島民会議 あわじ)</p>	<p>資料を今日初めて目にした。以前は事前に送ってくれていたのを目を通せていた。ぜひ考えてほしい。</p> <p>アワイチや150があるのはご存知だと思う。今日も洲本から車に乗</p>

菜の花エコプロジェクト推進部会)

ってやってきたが、道中で10人ほどサイクリングしているのを見かけた。150を成功させるために、まず淡路市のICを下りてすぐのところは、自転車マークを付けてブルーのペインティングをしている。そこから鶴崎の方に走っていくとそういったものが全然ない。一度、洲本の国道28号線を自転車で走ってみてほしい。安全対策をどうしなければならぬか、そういったことを霞が関に発信した。まずはペインティングで先に自転車の道路を確保しなければならない。しかし道幅が狭いので、デンマークのように自転車道だけを設けられない。せめてペインティングをしてほしい。それを行うことで、150や鳴門海峡の自転車道、四国のセトイチを泊まりながら回ってもらえるというような可能性がある。自動車が自転車を追い抜くときは1m以上間隔を空けて通らないといけぬが、違反すると青切符を切られる。それで済まない場合は、赤切符となり処罰の対象となる。実際に自転車を走行したことがない人が議論して決めるのはやめてほしいと言ってほしい。声を出さないとそういうことになってしまう。自分も3泊しながら高校時代に一周したので、島外の方には安全に淡路島に来てほしい。淡路島の風土を皆さんに味わってもらおうと思うと、まずは命が守られるように安全が最優先である。

バイオマス利用の促進ということで過去に菜の花エコプロジェクトを提案した。貝原知事と井戸副知事からどういう戦略なのかと問われたので、淡路花博(ジャパンフローラ)2000が終わった時に淡路の風土に合った持続可能な島づくりに貢献したいと言った。既にその4年前には、国で菜の花エコプロジェクトネットワークを作られておりあちこちでプロジェクトが行われていたが、自分が住んでいる淡路島ではまだできていなかったのを提案した。

アドバイザーの先生方がおっしゃったように、淡路の棚田が今どういう状況か存じているのか、一度実際に見て回ってほしい。今週の月曜日からコンバインで洲本市の大野地区の菜種の刈り取りを行っているが、今使っているコンバインは大野地区で使うのに精いっぱいである。淡路市の方でも来週から天気を見ながら大町地区で刈り取りを行う予定であるが、今使っているコンバインは調子が悪いのでぜひ導入してあげてほしい。絵を描くだけではなく実際に持続可能な農業の仕組みを作らないといけぬ。今は電気自動車の補助金が色々あるが、農家が使っているのは軽トラックである。農民車ではなく軽トラックが一番仕事をしている。それを動かすような仕組みを作ることが持続可能な島づくりに必要である。

藤川 氏
(一般参加者)

5歳まで淡路島におり、現在は島外にいるが時々帰ってきている。あわじ環境未来島構想や菜の花エコプロジェクトは非常に素晴らしい取組だと思う。菜の花エコプロジェクトのホームページに廃食油からバイオディーゼル(BDF)を作り、バイオディーゼル車を走らせ

<p>井筒 兵庫県企画部 次長</p>	<p>るといったルーティーンが書いてあるが、今日の資料にはそれが抜けていた。色々な問題があつて抜いているのだと思うが、この問題は解決できると思う。現実には、京都市ではバイオディーゼルを使って市バスまで走らせている。まずはごみ収集車くらいであれば簡単に動かせると思う。シンボリックな取組として廃食油からバイオディーゼルを作って公用車を動かすといったことをやってほしい。</p> <p>3 閉会 (閉会挨拶)</p> <p>閉会にあたりご挨拶申し上げます。</p> <p>昨年は、大阪・関西万博により兵庫県を含めて関西が大いに盛り上がった1年であった。兵庫県では、先ほどの取組の中でも触れられていたが万博を契機としてフィールドパビリオンを展開している。これは県全体をパビリオンとして見立て、地域の活動の現場そのものをフィールドに地域の方々が主体となって発信し、多くの方々を誘って見て学び体験していただくというものである。この3月からフィールドパビリオンのスタンプラリーを開始したところ予想以上に人気を博しており、スタンプを押してもらう台帳がなくなったため増刷している状況である。淡路島においても30ほどの体験プログラムがあるため、今後スタンプを押しに多くの方々が来られることも期待される。</p> <p>来年は万博の後ということで、ワールドマスターズゲームズ2027関西が開催される予定。概ね30歳以上のスポーツ愛好家であればどなたでも参加いただける国際総合競技大会であり、前回は台湾で開催された。来年も非常に多くの方が関西を訪れることが期待されている。淡路島においても南あわじ市でビーチバレーが開催される予定であるため、国内外の方々に淡路島の魅力を知っていただく絶好の機会である。</p> <p>あわじ環境未来島構想においては、エネルギー・農と食・暮らしの3つの持続が実現する地域に向けてこれまで地域やNPO法人の方々、企業や行政が一体となって取組を進めてきた。しかし、昨今の国際情勢の変化等によりエネルギーの供給の不確実性が高まっている。エネルギーや食の安定供給が重要な課題となっている中で、エネルギーや食の自給を進めていく当構想は一層意義を増しているのではないかと考える。</p> <p>本日は皆様より多くの活動の報告や意見を伺った。この取組は淡路島のポテンシャルを大いに引き出すものであると改めて実感したところである。当構想が目指す、持続する環境の島の実現に向け、今後も皆様と共に歩み続けるということを申し上げ、閉会のご挨拶とさせていただきます。</p>
-------------------------	---